



忘れがたき日本語の基礎

わす

にほんご きそ

ピ・タ・パラカン

日本語が母国語ではないぼくにとって、30年も前に、大学の4年の間に集中的に習った日本語の基礎はいまだにしぶとく残っている。しぶとく、というのは、時々その基礎へのこだわりを捨てることができればもっと楽になるのに、と感じるからだ。それほど最近耳に入ってくる日本語には生理的に嫌なものが多い。

まず、もう抵抗のしようもないが、「らヌキ言葉」は耐えられない。「食べれる」、「見れる」といった類いのものだ。最初は若い人だけの現象かと思っていたが、その親の世代も今ほとんど全員そういう話し方になってきているから、恐ろしいと言う他ない。20年後にはおそらく「食べられる」や「見られる」が死語になってしまうと思うと、絶望的な気分になる。学校でこのような根本的な言葉遣いの間違いを直していないというのも愕然とする事実だが、最近の公立学校では秩序を保つだけで精一杯という話を聞くと、文法のことを言っている場合ではないかも知れない。

もう一つ神経にさわるのは、「……的に」の使い方だ。本来副詞として広く使われるものだが、このころ、例えば「あなたとして」とか、「あなたの立場で

は」といった時に、「ピ・タ・さんの的にはどうですか」ときかると本当にムカツク！まあ、これが一過性の流行り言葉にすぎないことを祈っている。

ついでにもう一丁。「……系」の乱用は気に入らない。この国ではもともと物事を必要以上に分類したがる傾向を感じる。特にぼくの専門分野の音楽では、これはロックとか、あれはジャズとか、決めなければ聴き方が分からないような不思議なところがあって、聴く人がわざわざ音楽の楽しさを狭めているような気がする。そして最近はずべてが「……系」で表現されるようになってきた。「ロック系」、「ジャズ系」、「カントリー系」などで、いっしょくたにして欲しくないものまでが安易に一つの「箱」に片付けられてしまう。

「渋谷系」とか「新宿系」にいたっては、その界限で作られるものがすべて似通っているということだろうか。

日本語について書いて欲しいと依頼されたので、普段は黙って我慢している現象のことをつつい書きたくなくてしまった。日常的に指摘するのは自分の子供達の言葉遣いだけだが、すぐうるさい親父系になってしまう。それでもぼく的にはいいんだけどね……。

(ブロードキャスター)